

視覚方言のスペリング

ハーストンの『ヨナのとうごまの木』より

小林 泰 秀

Spellings of Eye Dialects: With Special Reference to Hurston's *Jonah's Gourd Vine*

Yasuhide KOBAYASHI

Abstract

An eye dialect is unusual spelling intended to represent dialects or colloquial idiosyncrasies of speech (OED). Eye dialects show us the racial differences and social standings of individuals. An author uses certain spelling styles of eye dialects. For example, Hurston uses the spellings, *awright* 'alright/all right', *b'lieve* 'believe', *'cause* 'because' and does not accept the spellings like *awryt*, *b'leev*, *kawz* which do not keep the spellings of original words. The change of spellings of words is dependent on the author's intention to describe the characters of a novel.

1. 文字と発音

人間が意志を伝達する手段として初めは音声と身振りを使用した。やがて音声を表記する手段として文字が人工的に作られるようになった。そのような文字は音声を正しく導くものであり、音声と一致するものでなければならない。従って、文字を習得した英語母国語話者は、今まで

一度も見たことのない次のような語を、発音記号で示したように発音するであろう。

(1) 文字と発音の対応

- a. gaty[*gɛti*], gatty[*gæti*], ganty[*gænti*]
- b. scupe[*skju:p*], scup[*skʌp*], sculp[*skʌlp*]
- c. snope[*snoʊp*], snople[*snoʊpl*], snop[*sna/ɒp*], snopple[*sna/ɒpl*]
- d. brind[*bramd*] (wind [wɪnd] は例外的),
brint[*brɪnt*] (pint[*pamt*] は例外的)

一方、英語の文字と発音の対応は単純ではない。外来語の導入や歴史的音変化が起り、現在ではスペリングどおりに発音できない語も多い。そのような語には、正しい発音を導くための IPA (International Phonetic Alphabet) が重要となる。

(2) IPA 表記

amoeba[*əmi:bə*], bouquet[*bʊkeɪ*], buoy[*bɔɪ*], bury[*bɛri*],
choir[*kwaɪə*], colonel[*kə:nl*], corps[*kɔə*], croissant[*krwa:sɑ:n*],
knight[*nart*], Michael[*mɑ:kəl*], Michel[*mɪʃɛl*], mortgage[*mɔə:ɡɪdʒ*],
psalm[*sɑ:m*], sword[*sɔəd*], women[*wɪmɪn*]

IPA の発音記号が読める者にとっては、(2) の語の発音は容易であるが、IPA を学ばなかった者にとっては IPA の記号は厄介なものである。そこで多くの辞書編纂者が IPA を学ばない者でも発音できる文字発音記号を考案してきた。Cordry (1998) の *A Dictionary of American English Pronunciation* には、(2) に挙げた語の発音が次のように表記されている。|| は文字発音記号を表わし、大文字は強勢のある音節である。

- (3) Cordry の文字発音表記 (alphabetical phonetic representation)
 amoeba [uh-MEE-buh], bouquet [boo-KAY], buoy [BOY],
 bury [BEHR-ee], choir [KWYRE], colonel [KER-n'l],
 corps [KOR], croissant [krwah-SAHN], knight [NYT],
 Michael [MY-k'l], Michel [mee-SHEL], mortgage [MOR-gij],
 psalm [SAHM], sword [SAWRD], women [WIH-min]

(3) の Cordry の発音表記は IPA と同じく、その記号からは元の語のスペリングを予想することはできない。[KER-n'l] と [MY-k'l] の 'l' は el の e が省略されていることを表わしているが、buoy-boy, bury-berry, colonel-kernel, corps-core, knight-night, sword-sawed のような同音異義語の発音も同じ記号で表わしている。

文章の中では、語の持つスペリングの価値をできるだけ失わずに、しかも発音に近い文字で表わす用法がある。次の表記は (3) の文字発音記号ほど音声的ではないが、元の語のスペリングをできるだけ保持し、語の価値を損なわずに読めるように工夫したものである。

- (4) 視覚文字素表記 (eye graphic representation)
 ameeba 'amoeba', booquay 'bouquet', b'oy 'buoy', bery 'bury',
 kwire 'choir', curnel 'colonel', cor' 'corps', crwasan' 'croissant',
 'nite 'knight', Mik'el 'Michael', Mishel 'Michel', mor'gige
 'mortgage', 'salm 'psalm', s'ord 'sword', wimen 'women'

作家が小説の中の人物の非標準的な話し方を表わすスペリングは、元の語が復元でき、しかも正しい発音を導く視覚文字素 (eye grapheme) であることが望まれる。Cordry の用いる文字発音表記では元の語が損なわれ、英語表現による小説の価値が失われてしまう。作家が非標準的な話し方を表わす (4) のようなスペリング、つまり視覚文字素表記は視覚方言 (eye dialect) と呼ばれるものである。視覚方言は、小説の中の人

物が話す言葉を表現しているが、元のスペリングと Cordry の用いる文字発音表記の中間に位置するものと言えよう。

視覚方言のスペリングには、必ずしも一定の法則があるわけではない。例えば /k/ の発音は、(4) では元のスペリングを保持して *curnel* = *colonel*, *cor'* = *corps*, *crwasan'* = *croissant* と <c> に綴ったが、*kurnel* = *colonel*, *kor'* = *corps*, *krwasan'* = *croissant* であっても語頭の文字素 <c> は復元可能である。実際、ハーストンの作品にも *kin* 'can', *keer* 'care', *kivver* 'cover', *keerful* 'careful', *ketch* 'catch', *skeered* 'scared' のように <k> に変えた語もあるが、*'cordin'* = *according*, *'cause* = *because*, *'cross* = *across*, *'count* = *account*, *comp'ny* = *company'*, *col'* = *cold* のような省略のある語は <c> のままである。方言らしさを最大限表現しようとしても、*kan't* = *can't*, *kome* = *come*, *kry* = *cry*, *krop* = *crop*, *kall* = *call* のように <k> に変えるのは英語らしさを損なうことになるので、作家が敢えて避けるところである。

2. 視覚方言の定義

作家が非標準的な話し方を表わすために用いるつづり字は視覚方言と呼ばれるが、視覚方言の定義には多様性が見られる。以下に定義について記述している辞典をいくつか挙げる。

(5) 視覚方言の定義

1. *The Oxford English Dictionary*

unusual spelling intended to represent dialectal or colloquial idiosyncrasies of speech (see quotes.) 1925 G. P. Krapp *English Language in America*, I. Iv. 228.

The impression of popular speech .. is often assisted by what may be termed 'eye dialect', in which the convention violated is one of the eye, not of the ear. Thus a dialect writer often spells a word

like *front* as *frunt*, of *face* as *fase*, or *picture* as *pictsher*, not because he intends to indicate here a genuine difference of pronunciation, but the spelling is merely a friendly nudge to the reader.

2. *Webster's Third New International Dictionary*

the use of misspellings that are based on standard pronunciations (as *sez* for *says* or *kow* for *cow*) but are usu. intended to suggest a speaker's illiteracy or his use of generally nonstandard pronunciations.

3. 『新英和大辞典』第6版

says を *sez* とつづるなどして、話し手が無学であるという印象を伝えようとするもの。

4. 『ジーニアス英和大辞典』

作品の中の人物が方言や俗語を使っていることを示すために用いられるつづり字；*hoss* (*horse*), *massa* (*master*), *wuz* (*was*) など；本辞典では〈視覚方言〉として表記。

5. 『英語学要語辞典』寺澤芳雄 [編]

文学的な手法として、方言使用を明示するためにとられる臨時綴りや誇張した表現をいう。例：*giv* (= *give*), *sez* (= *says*), *wuz* (= *was*), *sayin'* (= *saying*)。

6. 『英語学用語辞典』荒木一雄 [編]

作家が作中人物の方言の描写の際に用いる綴り字をいう：

Eye wuz ekspekting sum wimmin. (= *I was expecting some women.*) 地域的・階級的方言使用者であることを示唆する。

六つの辞典が述べている視覚方言の定義を上記したが、『ジーニアス英和大辞典』だけが俗語の使用も示すと述べているが、本辞典の視覚方言の項目には、俗語が見当たらない。俗語 (*slang*) である *airmail* 「窓から捨てられたごみ」や *smoke* 「怒る」などは《米俗》と表記され、《視覚方言》と区別されている。『ジーニアス英和大辞典』が視覚方言としている

俗語は、非標準的な地域方言に見られる俗語を指していると思われる。しかし、視覚方言のスプリングはあくまでも元となる書記素があり、発音規則によって説明され得るものでなければならぬので、例えば airmail 《米俗》が e'rmale と綴られても、それを視覚方言とは呼ばないであろう。一般に俗語と呼ばれる語は、視覚方言とは見なされない。

視覚方言の使用目的は、要約すると次の三つに分けられるであろう。

(6) 視覚方言の使用

1. 標準発音と同じ発音であるが、無学の者の発音を誇張するために、難しい綴り字を簡潔な表記に変える。

blest = blessed, bizness = business, edoocation = education, enuf = enough, lissen = listen, minnit = minute

2. 口語表現の音変化や脱落を、時には別の綴り字を使って、ユーモア性のある表記にする。

breakfus' = breakfast, 'elpin' = helping, should of been (have), sperit = spirit, yella = yellow

3. 標準的発音とは異なる方言を表記する。

aholt = hold, ebbery = every, eeder = either, erth = three, fambly = family, mouf = mouth, twell = till

視覚方言の使用が、(6-1)と(6-2)にあるのはどの辞典も異論のないところであるが、(6-3)の方言の表記については、『ジーニアス英和大辞典』以外にその例が挙げられていないので、どの程度のスプリングの違いまでを視覚方言と認めるのか明確ではない。しかし、本稿では、*Webster's Third New International Dictionary* の定義に従い、作品中の人物の非標準的な発音を表記する綴り字を視覚方言とする。

3. 視覚方言の使用背景

本稿は、米国黒人作家ゾラ・ニール・ハーストン (Zora Neale Hurston, 1903-1960) の最初の長編小説である『ヨナのとうごまの木』 (*Jonah's Gourd Vine*, 1933) のスプリングに注目し、視覚方言がどのような原則によって記述されているかを見てみたい。『ヨナのとうごまの木』は、白人の血が混ざっていると思われる黒人少年ジョン (John Buddy, 後に John Pearson) が仕事を求めて川向こうの村へ行くことから物語が始まる。彼は説教がうまく、人を引きつける術に秀でていることから、教会の牧師 (preacher, pastor), そして町長になり、ついには総会議長 (moderator) にまで出世する。しかし、彼の素行の悪さが批判され、すべての名誉職を失うことになる。失墜の彼を救ってくれた女性と再婚し、幸せな日々を送るのであるが、再び過ちを犯してしまう。悔い改め、心の安楽を求めて妻の元へ帰ろうとする途中、自ら運転する車が機関車に正面衝突し、自らを死に至らしめるという物語である。

この小説の序文でリタ・ダヴ (Rita Dove; xiv) は作中の人物の言語について、「ハーストンの言葉はすばらしく言葉のやり取りと諺が豊富に使われ、南部の田舎の黒人の方言を良く表現している」(Hurston's language is superb, rich with wordplay and proverbs—compelling when it comes to rendering the dialect of the Southern rural black...) と述べている。リタ・ダヴが小説の中の黒人英語を南部の田舎の黒人の方言 (dialect) と呼んでいるのは、黒人英語も地域差や階級差によって変種が見られるからである。また、黒人が日常話している英語は、Black English Vernacular もしくは African American Vernacular English と呼ばれている。

黒人英語 (Black English) と言うと、黒人だけが話す英語という印象を与えてしまうが、特に南部の白人の方言には、黒人の話す言語と類似したものが多く見られる (小林: 1997)。「黒人英語」というのは、大多数の黒人が話す非標準的な英語であるが、白人と黒人に共通に見られる

方言も黒人英語と見なすことにする。黒人英語とは黒人の生活言語に組み入れられた方言であり、白人も用いているから黒人の言葉ではないということにはならない。言語に境界線を引くのは難しく、歴史的に長い間人的交流のあったアメリカでは、当然のことながら言語の交流もあり、黒人の話していた言葉が白人に影響を及ぼしたとも考えられるのである(小林:1994)。本稿で用いている「黒人英語」というのは、黒人が意識的にしろ無意識的にしろ、日常使っている彼等独自の言語である。

作家が作品中の人物の言葉を表現する際、話す人と聞く人の年齢・身分や物語の背景によって、視覚方言の使用や文体が大いに変化している。『ヨナのとうごまの木』の中でも、非標準英語のスプリングの使用は、状況によって異なっている。主人公のジョンや彼を取り巻く人達の英語に注目し、登場人物と使用言語との関連を見てみよう。次の会話はジョンの家庭内でのものであるが、ネッド・クリテンデン(Ned Crittenden)はジョンの継父であり、ジョンが4才の時に母親のエミイ(Amy)と結婚している。物語はジョンが16才の時から始まっている。

(7) a. ジョンと父母との会話 (p. 2)

Ned: Shet dat door. John! You ain't got the sense you wuz borned wid.

Amy: Who dat comin' heah, John?

John: Some white folks passin' by, mama. Ahm jes' lookin' tuh see whar dey gwine.

Ned: Come out dat do'way and shet it tight, fool! Sand dere gazin' dem white folks right in de face! Yo' brazen ways wid dese white folks is gwinter git you lynched one uh dese days.

Amy: Aw 'tain't. Who can't look at ole Beasley? He ain't no quality no-how.

Ned: Shet dat door, John.

John: Ah wuzn't de last one inside.

Ned: Don't you gimme no word for word. You jes' do lak Ah say do and keep yo' mouf shet or Ah'll take uh trace chain tuh yuh. Yo' mammy mought think youse uh lump uh gold 'cause you got uh li'l white folks color in yo' face, but Ah'll stomp yo' guts out and dat quick! Shet dat door.

b. ジョンと母親との会話 (p. 11)

Amy: Ah hates tuh see yuh knucklin' under 'round heah all de time. G'wan, son, and be keerful uh dat foot-log 'cross de creek. De Songahatchee is strong water, and look out under foot so's yuh don't git snake bit.

John: Ah done swum dat ole creek, mama—'thout yuh knowin'. Ah knowed you'd tell me not tuh swim it.

Amy: Dat's how come Ah worries 'bout yuh. Youse always uh runnin' and uh rippin' and clambin' trees and rocks and jumpin', flingin' rocks in creeks and sich like. John, promise me yuh goin' quit dat.

(7a) はジョンが戸を開けて白人を見ているのを、ネッドが閉めろと怒鳴っている場面である。(7b) はジョンが新天地を求めてビッグ・クリークを泳ぎ渡る前に、母親と別れの会話を交わす場面である。(7) はいかにも黒人の方言らしい会話文であるが、作者が英語本来のスペリングを保持しようという意図が見られる。視覚方言を強調しようとするれば、次のようなスペリングがあっても良い。

- | | | |
|--------|-----------|---|
| (8) a. | <gh> の削除 | mought → mou't 'might' |
| b. | <k> の削除 | knucklin' → 'nuclin' 'knuckling'
knowin' → 'nowin' 'knowing' |
| c. | /ð/ → /d/ | 'thout → 'dout 'without' |
| d. | の削除 | clambin' → clamin' 'climbing' |

ハーストンは、標準発音と同じ語のスペリングを必要以上に変えることはしない。ハーストンの視覚方言は、必ずしも作中人物の教育程度の低さを表わすものではなく、標準発音と異なる方言の描写だからである。従って、ハーストンは (7) の文の中にも、次のような同音異綴のスペリングは用いていない。

(9) 同音異綴

door → dor, come → kum, right → rite, tight → tite,
lynched → lincht, who → hoo, quality → kwahlitee,
color → kuller, quick → kwik quit → kwit

あまりにもスペリングを変えてしまうのは、読者にとっては読みづらく、小説の価値そのものに影響を及ぼしてしまいかねない。作者は、黒人の方言で書いてはいるが、小説を読むのは標準英語を学習した英語話者であることを念頭に置いているのである。

作家が標準的なスペリングと非標準的なスペリングの使い分けに不注意なものもある。例えば、(7a) の Ned に “You ain’t got the sense you wuz borned wid.” がある。他の文では the はすべて de である。もう一例挙げると、語末の <ng> は lookin’, runnin’ のように /n/ と発音されるので、strong も stron’ と綴られて良いはずである。

作家の中にはハーストンのように同音異綴の語を自ら進んで作りだそうとしない作家と、同音異綴の語を使って敢えて非標準性を出そうとする作家がいる。Winston Goom の *Forrest Gump* (1986) と Mark Twain の *The Adventures of Huckleberry Fin* (1885) を比べて見よう。次の文は、*Forrest Gump* の書き出しの文である。

(10) *Forrest Gump* の文 (p. 1)

LET ME SAY THIS: BEIN A IDIOT IS NO BOX OF CHOCOLATES.
People laugh, lose patience, treat you shabby. Now they says folks

sposed to be kind to the afflicted, but let me tell you—it ain't always that way. Even so, I got no complaints, cause I reckon I done live a pretty interestin life, so to speak.

I been a idiot since I was born. My IQ is near 70, which qualifies me, so they say. Probly, tho, I'm closer to bein a imbecile or maybe even a moron, but personally, I'd rather think of myself as like a halfwit, or somethin—an not no idiot—cause when people think of a idiot, more'n likely they be thinkin of one of them Mongolian idiots—the ones with they eyes too close together what look like Chinamen an drool a lot an play with theyselves.

主人公の Forrest Gump は南部出身の白人であるが、知能指数が70程度の低能力者である。作家は非標準的なスペリングを用いることで彼が知能が低く、風変わりな人物であることを表現しているが、標準音のスペリングを変えている語はない。同音異綴と思われる *tho* (= *though*) は、『ジーニアス英和大辞典』では《米略式》と記され、その視覚方言は *thaw* である。

標準音のスペリングを変える同音異綴の語を *The Adventures of Huckleberry Fin* に見てみよう。括弧内は Chapter と掲載ページである。

(11) *The Adventures of Huckleberry Fin* の同音異綴語

- a. The Widow Douglas, she took me for her son, and allowed she would sivilize (= civilize) me; ... (Chapter 1: 17)
- b. "..., en swim asho' en take to de woods on de Illinoi (= Illinois) side, ..." (Chapter 8: 70)
- c. "Keep away, boy—keep to looard (= leeward)." (Chapter 16: 126)
- d. ... and all the family was living on a little farm down at the bottom of Arkansaw (= Arkansas), ... (Chapter 17: 135)

- e. "... your eyes is lookin' at this very moment on the pore disappeared Dauphin, Looy (= Louis) the Seventeen, ..." (Chapter 19: 164)
- f. "I should a reckoned the difference in rank would a sejested (suggested) to you ..." (Chapter 20: 168)
- g. "Less make up the deffisit (= deficit) " ... (Chapter 25: 215)
- h. "Blest (Blessed) if the old Non-such ain't a heppin' us out agin" ... (Chapter 25: 215)
- i. So I smouched (= smooched) one, and they come out nine same as the other time. (Chapter 37: 320)
- j. "So now I got to go and trapse (= traipse) all the way down the river, ..." (Chapter 42: 362)
- k. "... and find out what that creetur's (= creature) up to, this time ..." (Chapter 42: 362)

Mark Twain の同音異綴語の使用は、必ずしも会話文の中にあるものではない。第 1 人称のナレーターである *Huckleberry Finn* の叙述を方言で表わし、親しみを感じさせている。そのスペリングは *Cordry* のような文字発音表記ではなく、元の語の文字素をできるだけ保持している。

4. 視覚方言の使い分け

作品の中での視覚方言の使い分けは、身分、年齢、階級、地域、人種を表わすものとして重要である。『ヨナのとうごまの木』にスペリングの違いを見ていこう。

ジョンが泳いで渡った向こう岸の村は、文化的にも教育的にも水準の高いところである。次の場面は、ジョンが前に母親が仕えたアルフ・ピアソン (Alf Pearson) を訪ね、仕事を乞うところである。ピアソンは仲間から判事 (Judge) と呼ばれる身分の高い白人である。

(12) ジョンとアルフ・ピアソンとの最初の出会い (p. 17)

John: Is you Mist' Alf?

Alf: Why yes, what're you want?

John: Ah wants uh job uh work, please suh.

Alf: ... Your face looks sort of familiar but I can't place you.
What's your name?

John: Mama, she name me Two-Eye-John from a preachin' she
heered, but dey call me John Buddy for short.

Alf: How old are you, John?

John: Sixteen, goin' on sebenteen.

Alf: Dog damn! Boy you're almost as big as I am. Where'd you
come from?

John: Over de Big Creek. Mama she sont me over here and told
me tuh ast you tuh gimme uh job uh work. Ah kin do mos'
anything.

(12) でのアルフの会話文は完全な標準英語である。what're you want? は what do you want? を口語調で述べた発音である。ジョンの言葉は黒人英語であるが、旦那の前ではかなり気を使って話しているのが随所に見られる。例えば you, for, goin', here, told, anything は普通の会話では yuh, fuh, gwine, heah, tole, anythin' と綴られるであろう。

アルフがかなり身分の高い教養のある人物であるのは、次の彼の友達との会話でも示されている。友達がジョンについて聞いているところである。

(13) アルフと彼の友達との会話 (p. 18)

Friend: Say, Judge, where'd you get the new house-nigger from?

Alf: Oh a boy born on my place since surrender. Mama married
some stray darky and moved over the Big Creek. She sent

him over here work and he ran into me and I'm hiring him.
 Did you ever see such a splendid specimen? He'll be a
 mighty fine plow hand. Too tall to be a good cotton-picker.
 Sixteen years old.

Friend: Humph! Plow-hand! Dat's uh house-nigger. His kind don't
 make good field niggers. It's been tried. In his case it's a
 pity, because he'd be equal to two hands ordinary.

友達の言葉には非標準的な表現がいくつか見られるが、かなり標準英語に近い。本文からは友達が白人か黒人かが明確ではないが、アルフに対しても Dat's uh house-nigger と発音していることから、黒人であろう。彼は人を使用する身分にあり、黒人としても高い階級にいる。

作品の中の白人の言葉をもう1つ引用して見よう。ジョンはのちにノタサルガの町を追放になり、サンフォードへ行くのであるが、車を降りてすぐに白人の出向かいを受ける。次の文は、赤ら顔の白人 (red-faced white man) とジョンの相棒 (mate) とジョンの会話である。

(14) ジョンと赤ら顔の白人とジョンの相棒との会話 (p. 105)

White man: Where y'all come from?

John's mate: Up de road uh piece in Wes' Florduh.

White man: Want work?

John's mate: Ah kinda got uh jobo promised tuh me already.

White man: How 'bout you, Big Yaller?

John: Nawsuh, Ah ain't got no job. Ah would love tuh hear
 tell uh one.

White man: Come along then. Even done any work on uh railroad?

John: Nawsuh, but Ah wants tuh try.

White man: Git yo duds then. We going over to Wildwood. Dollar
 a day. Seaboard puttin' thru uh spur.

赤ら顔の白人の英語は、アルフ・ピアソンとはかなり違った方言の強いものであるが、黒人の話し方ではない。y'all (= you all), 'bout (= about), Yaller (= Yellow), uh (= a), git (= get), yo (= your), putin' (= putting), thru (= through) のような非標準的なスペリングが使われているが、where (= whar), going (= gwine), a (= uh) のスペリングは、白人の言葉を表わすものである。

ジョンは、ビッグ・クリークを渡って新しい土地に来てから友達ができ、一緒に遊ぶことになる。次の文は「かくれんぼ」(Hide and Seek) している時に女友達のフロニイと交わす会話である。

(15) ジョンとフロニイとの会話 (p. 23)

John: Less we run in whilst she gone de other way.

Phrony: Naw, less we lay low 'til she git tired uh huntin' us and give us free base.

John: Aw right, Phrony, but Ah loves tuh outrun 'em and beat 'em tuh de base. 'Tain't many folks kin run good ez me.

Phrony: Ah kin run good, too.

John: Aw, 'tain't no girl chile kin run good ez me.

Phrony: Ah betcha 'tis. Lucy Pott kin outrun uh yearlin' and rope 'im.

John: Humph! Where she at?

Phrony: She live over in Pottstown. Her folks done bought de ole Cox place. She go to school. Dey's big niggers.

John: She uh li'l bitty gal wid black eyes and long hair plats?

Phrony: Yeah, dat's her. She leben years ole, but she don't look it.

(15) のジョンとフロニイとの会話は、いかにも十代の黒人同士が話す口語文である。ジョンはやがて学校へ行き、リーダーの数ページの書き方を覚え、加減乗除ができるようになる。終業式の練習をしている時、

ジョンは学校で、あるいは教会で常に意識していたルーシイと二人だけで話す機会を得ることになる。

(16) ジョンとルーシイとの会話 (1) (p. 32)

John: Wisht Ah could speak pieces lak you do.

Lucy: You kin speak 'em better'n me. You got uh good voice for speakin'.

John: But Ah can't learn no long ones lak you speaks. When do you learn 'em?

Lucy: In de night time round home after Ah git thru wid mah lessons.

John: You ain't got many mo' days tuh be studyin' of nights. Den Whut you gwine do wid yo'self?

Lucy: Mama always kin find plenty fuh folks tuh do.

John: But Ah mean in de night time, Lucy. When youse thru wid yo' work. Don't you do nothin' but warm uh chair bottom?

Lucy: Oooh, John Buddy! You talkin' nasty.

John: Whuss nasty!

ルーシイとの会話とフロニイとの会話を比べてみると、ジョンの文法構造がかなり標準英語に近くなっているのが分かる。疑問文 *do* の挿入、接続詞の後の文構成、*to be* 形など、英語の文型になっている。ジョンとルーシイの生い立ちと階級は全く異なるのであるが、ハーストンがジョンの言葉の非標準性をルーシイのレベル近くまで上げているのは、ジョンが多少とも丁寧な言葉を言えるようになり、ルーシーの英語に近づいてきたと思われる。この会話で、ジョンが *bottom* (お尻) という言葉がいやらしいとは思わずに使ったのに対して、ルーシイが驚くのは、育った家庭の違いにあり、ハーストンは二人の言葉は近くなったが、この二人には依然として隔たりがあることを示している。後に二人は結婚するのだが、次の結婚直前の求愛の会話にも、下線部のような言葉の違いが

見られる。

(17) ジョンとルーシイとの会話 (2) (pp. 75-76)

Lucy: Look, John, de knot is tied right, ain't it pretty?

John: Yeah, Lucy iss sho pretty. We done took and tied dis knot,
Miss Lucy, less tie uh 'nother one.

Lucy: You got mo' han'kerchiefs in yo' pocket?

John: naw, Ah ain't studin' 'bout no hankechers neither. De knot
Ah wants tuh tie wid you is de kind dat won't come uh
loose 'til us rises in judgment.

ルーシイが *han'kerchiefs* と発音しているのに対して、ジョンは *hankechers* [hæŋkətʃəz] と発音している。ジョンの言葉に *iss* (=it is), *less* (=let's), *us* (= we) や三重否定の *neither* を使用しているのも、強い方言性をあらわすためである。ルーシイもこれらの言葉を使うことがあるが、プロポーズのこの場面では、ずっとしとやかに見える。

黒人の子供同士の会話では、英語の標準性に大差は見られないのであるが、これが白人と黒人の会話となると、作家ははっきりとした区別を表わしている。次の会話は *The Adventures of Huckleberry Fin* からのものであるが、死んだと思われている白人のハックと逃走して島にたどり着いた黒人のジムが食べるものについて話している場面である。

(18) ハックとジムとの会話 (Chapter 8: 67-68)

Huck: It's good daylight. Le's get breakfast. Make up your camp
fire good.

Jim: What's de use er makin' up de camp fire to cook strawbries en
sich truck? But you got a gun, hain't you? Den we kin git
sumfn better strawbries.

Huck: Strawberries and such truck. Is that what you live on?

Jim: I couldn' git nuffn else.

Huck: Why, how long you been on the island, Jim?

Jim: I come heah de night arter you's killed.

Huck: What, all that time?

Jim: Yes-indeedy.

Huck: And ain't you had nothing but that kind of rubbage to eat?

Jim: No, sah—nuffn else.

Huck: Well, you must be most starved, ain't you?

Jim: I reck'n I could eat a hoss. I think I could. How long you ben on de islan'?

Huck: Since the night I got killed.

文法の違いだけでなく、語のスペリングにしても Jim の言葉には視覚方言が多く見られる。作家は (18) の会話文でも *git = get, strawbries = strawberries, sich = such, islan' = island, nuffn = nothing, ben = been* の語に違いを表わし、白人と黒人の方言の違いを顕著にしている。

黒人同士の会話での非標準性は、年令よりも身分の違いに顕著に表れている。ジョンがピアソンの下で働いているフィーミイ婆さん (Ole Pheemy) と交わす会話と、中年の教員であるルーシイの伯父と交わす会話を比べてみよう。次のフィーミイ婆さんとの会話は、彼女が自分の小屋にあるベッドをジョンに用意している時に、ジョンがエミイの子供であることを聞き、自分が助産婦だったことを告げる場面である。

(19) ジョンとフィーミイとの会話 (pp. 18–19)

Pheemy: Take dis bed heah if hit's good 'nough fuh yuh.

John: Yassum, thankee ma'am. Ah laks it jes' fine, and dis sho is uh pritty house. (He was looking at the newspaper plastered all over the walls. Pheemy softened)

Pheemy: Oh you ain't one uh dese uppity yaller niggers then?

John: Oh no ma'am. Ahm po' folks jes' lak you. On'y we ain't got no fine houses over de Creek lak dis heah one.

Pheemy: Whus yo' name.

John: John, but Zeke and Zack and dem calls me John Buddy, yassum.

Pheemy: Who yo' folks is over de Big Creek?

John: Mama she name Amy Crittenden—she—.

Pheemy: Hush yo' mouf, you yaller rascal, you! Ah knowed, Ah seed reckerlection in yo' face. Well, Lawd a'mussy boy! Ahm yo' granny! Yo' nable string is buried under dat air chanyberry tree. Member so well de very day you cried. Eat dis heah tater pone.

上記のジョンとフィーミは年齢が一世代以上も離れているのだが、言葉の非標準性に関しては、両者に大きな違いは見られない。ハーストンは上記の会話で pritty 'pretty' と reckerlection 'recollection' の同音異綴の視覚方言を使用している。言葉の非標準性は身分の違いにはっきりと表れている。次の会話はジョンと先生であるルーシイの伯父とのものであるが、ジョンが初めて学校へ行った場面である。

(20) ジョンと先生との会話 (pp. 25-26)

Teacher: Come heah, you. Don't you know no better'n to come in my school and sit yo'self down without sayin' a word to me?

John: Yassuh.

Teacher: If you know better, why did you do it? I ought to put forty lashes on yo' bare back. You come to school?

John: Yassuh.

Teacher: Don't say 'yassuh' to me. Say 'Yes suh.' What's yo' name?

John: John.

Teacher: John whut? You got some other name besides John.

John: Mama, she name me Two-Eye John—. But mama and all of 'em at home calls me John Buddy.

Teacher: Buddy is a nickname. What's yo' papa' name?

John: 'Deed Ah don't know, suh.

Teacher: Where do you live?

John: On Mista Alf Pearson's place.

Teacher: Was you born there?

John: Yes suh.

Teacher: Well, Ah'll jus' put you down as John Peason and you answer by that, you hear?

John: Yes suh.

Teacher: Ever been to school before?

John: Naw suh.

Teacher: Well, you get over there in de A B C class and don't let me ketch you talkin' in school.

上記の会話で 'Teacher' はかなり白人に近い英語を話している。彼の言葉にも better'n (=better than), sayin', yo'self, papa' (=papa's), ketch (=catch), de (=the) のような発音はあるが、他の黒人に用いられている yuh (=you), set (=sit), 'dout (=without), tuh (=to), ef/effen (=if), uh (=a), whar (=where), jes' (jus'), befo'/'fo' (=before), dere (=there), wuz borned (=was born), heer (hear), ez (=as) ではなく、括弧内に挙げた標準綴りが用いられている。しかし、what と whut, let me と lemme, I と Ah は両方使用されている。what と whut の使い分けは、文頭では常に what であり、目的語の位置では whut である。文頭により強調が置かれている。let me は念を押す表現である。I と Ah の使い分けは、会話のはじめの部分では教員という身分の違いが I の使用に表

れているが、ジョンと話しているうちに Ah とくだけた表現になっている。(18) の会話では黒人のジムが I と言っているが、ハーストンの小説では、I は身分が高く教養のある黒人しか発音しない。しかし、書いた文では、学校に行った子供であれば I を使用する。次のルーシーがジョンに送った (21a) のラブレターには I があり、(21b) のジョンに渡すメモ (note) では you の be 動詞として are が使用されている。一方、口語表現では常に you is である。

(21) ルーシーのラブレターとメモ

- a. Sweet Notasulga, Chocklit Alabama Date of kisses, month of love Dere John, you is my honey. I won't never love nobody else but you. I love choir practice now. Sugar is sweet, and lard is greasy, you love me, don't be uneasy. (p. 45)
- b. Long as the vine grow 'round the stump You are my dolling sugar lump. (p. 53)

身分や人種の違いがはっきりしている両者の会話であれば、作家は意識的に違いを際立たせようとするが、両者の間に身分や人種の違いがない場合には、スペリングの使い分けのはっきりしない語も作品の随所に見られる。(22a) ~ (21c) はエミイがネッドに話す文であり、(22d, e) はジョンに話す文である。

(22) you と yuh

- a. Amy: He is jes' ez obedient tuh you and jes' ez humble under yuh, ez he kin be. (p. 3)
- b. Amy: Naw, Ned, Ah don' want mine tuh come lak yuh come nor ne ther lak me, and Ahm uh whole heap younger'n you. You grewed up in slavery time. When Ole Massa wuz drivin' you in de rain and in de col'— he wasn't don' it tuh

he'p you 'long. (pp. 4-5)

- c. Amy: He don't do nothin'? He's uh better hand wid uh wide sweep plow right now dan you is, and he kin chop mo' coteon dan you, and pick mo' dan Ah kin and you knows Ah kin beat you anytime. (p. 6)
- d. Amy: Don't yuh take me tuh heart. Ah kin strain wid Ned. Ah jes' been worried 'bout you and him. ... He useter be crazy 'bout yuh. 'Member dat big gol' watch chain he bought fuh you tuh wear tuh big meetin'? ... Ahn kinda glad fuh yuh tuh be 'way from 'round 'im. ... Tell 'im whose boy you is and maybe he mought put yuh tuh work. And if he do, son, you scuffle hard so's he'll work yuh reg'lar. ... De Songahatchee is strong water, and look out under foot so's yuh don't git snake bit. (p. 11)
- e. Amy: Come tuh see me when yuh kin. G'bye. (p. 11)

you と yuh に発音の違いは、強形 [ju:] と弱形 [jə] にあろうが、文中で使われている二つのスペリングの違いには、発音よりも非標準性を強調しているように思われる。you と yuh の使い分けは、(22a) ~ (22c) を見ると文頭では通常 you であるが、それ以外の位置では you でも yuh でも構わないようである。(22c) では you のみが使われ、目的語の位置でも yuh は使われていない。その意図するところは you を強調しているというよりは、正しい英語で言い聞かせていると思われる。(22d, e) のジョンに話す文では、you と yuh の使用に一貫性がない。これは息子のジョンに対して、やさしく、くだけた表現になっており、ハーストンがどれだけ意識的に二つの語を使い分けているのかははっきりしない。

身分や人種や言語使用の背景によって言葉使いが異なることを『ヨナのとうごまの木』に見てきたが、どのような身分や人種であっても、祈

りの言葉は共通のものである。次の祈りは、ジョンの妻のルーシイが亡くなった時に、臨席した人々が調和して歌う言葉である。

(23) 祈りの言葉 (p. 135)

There is rest for the weary.

On the other side of Jordan, in the sweet fields of Eden—where the tree of life is blooming—

Man born of woman has but a few days.

ハーモニーに加わった人々が、上記の祈りの言葉を標準発音で唱えたかは疑問である。彼らは祈りを暗唱できるが、白人の発音を持っていないからである。しかし、教会での賛美歌は神聖なものであり万物に共通のものでなければならない。ハーストンが祈りの言葉を黒人英語にしなかった所以である。

5. ハーストンの視覚方言

作家は方言の発音に合わせて語のスペリングを変えているのであるが、それには一定の制約が見られる。黒人英語の *th* の発音は、一般的に [θ] は語末では [f]、語頭では [t] と発音され、語中では [f] にも [t] にも発音される (*nuffn* ‘nothing’, *wortless* ‘worthless’)。一方、[ð] はあらゆる位置で [d] と発音される。しかし、視覚方言のスペリングは、作家によって大いに異なっている。ハーストンは、語末の [θ] は *f* と綴るが、*t* とは綴らない。また [ð] については一貫性がない。

(24) *th* のスペリング

- a. *f*: *bofe* ‘both’, *mouf* ‘mouth’
- b. *th*[θ]: *nothin*’, *thing*, *somethin*’, *thankee*
- c. *d*: *dat* ‘that’, *de* ‘the’, *dem* ‘them’, *den* ‘then’, *dere* ‘there’, *dese*

'these', wid 'with'

d. th[ð]: botherin', 'nother, other, 'thout, tuhgether

th のスペリングをすべて t と d に変えるのはいかにも黒人英語らしいのであるが、ハーストンはその極端な表記を読み難さから避けたのであろう。そのことが外向きのスペリングと見なされるところである。

ハーストンに一貫性のないスペリングをもう一例見てみよう。黒人英語では、v はその発音の難しさから b に発音される。ハーストンが v を b に変えている語と変えていない語は次のものである。

(25) b と v のスペリング

a. b: eben, heben 'heaven', leben 'eleven', seben

b. v: aggervatin', b'lieve, devil, drivin', ever, ev'ry, give, have, lived, love, never, over, slavery, twelve, very, vip, vop, voice

v を b に変えていない語が多い。これは作家の意志によるが、それ以上に勝手に b に変えられない造語の制限があると思われる。つまり、これまで視覚方言として定着していない語のスペリングをむやみに変えるのは、読者に違和感を与えることになる。

作家は視覚方言を用いながらも、元の語のスペリングを保持しようとしている。ハーストンは次の下線で示したように、スペリングを変えていない。括弧内のスペリングは、Cordry が用いる文字発音表記である。

(26) スペリングの保持

awright(awryt), befo'(bihfo'), b'lieve(b'leev), b'longed (blong'd), 'buke (byook 'rebuke), 'cept ('sept), dancin' (dansin'), dese (deez), 'cause('kawz), fightin' (fytin'), 'head ('hed), judgment (jujm'nt), 'nife (nyf), 'round('rownd), 'scuse ('skyooz), whar(were)

視覚方言のスペリングで方言らしさを出そうする意図から、本来のスペリングとは別の文字を用いることも多い。しかし、英語の母国語話者には意味の把握が困難ということはないであろう。語の解釈は、ほとんど文脈によってなされるからである。標準英語にのみ親しんできた者にとっては、次の語を容易に把握できないであろう。

(27) スペリングの変化

dawg (=dog), fo' (=before), fuhgit (=forget), heah (=here), heer (=hear), heered/hiahed/hired (=heard), lak (=like), lakted (=liked), li'l' (=little), Lawd (=Lord), 'leben (=eleven), li'dud (=lightwood), naw (=no), nuff (=enough), skeers (=scares)

本稿では、『ヨナのとうごまの木』の視覚方言に注目し、作家が小説の背景に従って、意図的にスペリングを変えているのを見てきた。しかし、一方では、作家がそれほど個々の方言表現にこだわらないため、方言使用に一貫性が見られない個所も見られた。本稿はハーストンの作品を取り上げたが、他の作家の非標準語の記述にはそれぞれに違いが見られる。黒人英語の一般的な特徴はどの作家も表現するのであるが、どんな視覚方言を用いるかは作家にゆだねられている。

参 考 文 献

- 荒木一雄〔編〕(1999)『英語学用語辞典』三省堂。
 Cordry, Harold V. (1998) *A Dictionary of American English Pronunciation*, Austin & Winfield, Publishers.
 Groom, Winston (1986) *Forrest Gump*, Pocket books.
 Hurston, Zora N. (1990) *Jonah's Gourd Vine*, Harper Perennial.
 ゴラ・ニール・ハーストン著、徳末愛子訳(1996)『ヨナのとうごまの木』リーベル出版。
 小西友七・南出康世〔編集主幹〕(2001)『ジーニアス英和大辞典』大修館書店。
 竹林 滋〔編者代表〕(2002)『新英和大辞典』第6版研究社。

- 小林泰秀 (1994) 「黒人英語の成立と構造」『広島女学院大学論集』44, 55-79.
- 小林泰秀 (1997) 「ハーストンとスタインベックのスペリング」『広島女学院大学論集』47, 101-130.
- 小林泰秀 (2000) 「小説の中のスペリング——ハーストンの『彼らの目は神を見ていた』より——, 『言語の空間——牛田からのアプローチ——』英宝社, 217-231.
- Simpson, John A. and Edmund S. C. Weiner (1989) *The Oxford English Dictionary*, Clarendon Press.
- 寺澤芳雄 [編] (2002) 『英語学要語辞典』研究社.
- 豊永 彰 (1998) 『アメリカの文学方言』金星堂.
- Twain, Mark (1885) *Adventures of Huckleberry Finn*, Charles L. Webster and Company.
- Gove, Philip B. [Editor in Chief] (1993) *Webster's Third New International Dictionary*, Merriam-Webster, Inc., Publishers.